

介護夜話スペシャル

汰

Kaigo Yota Banashi

三好春樹
Haruki Miyoshi

かえ 還り道の思想へ

～経済より老人のいのち、原発より介護～

東日本大震災・津波についての衝撃は、いまだに私の心と身体の中に余震のように続いている。それは簡単に表現できるものではないように思われる。

それでも私は、たくさんの衝撃の中でも、ある複雑な衝撃については早く語っておかねばならないと思っている。それは、原発についてである。

原発事故についてのテレビの報道規制の露骨さには驚いた。福島第一原発で働いているスタッフの家族からのメールが紹介された。その内容はすでに日刊紙で報じられていて、私はほぼ全文（と思われる）を知っていた。それは要約すれば「地震は天災です。しかし原発事故は人災です。それは東電の原発がここにあったから起きたのです」という内容だった。

ところがテレビ番組では「地震は天災です」まで紹介してその後はプツリ切られていたのだ。そして、夫を心配する家族愛の話になっているのである。

テレビ局は、原発を推進してきた財界と自民党と電力会社とずっとタッグを組んできた。東京電力をはじめとする全国の電力会社は最も大口のスポンサーである。東電管轄地域の人たちは、“TEPCO “のコマーシャルをさんざん見せ

られていたはずである。

見るがいい。テレビ番組に出てくる原子力の専門家はみんな御用学者である。かれらの「安全」を信じたばかりに、私たちはこんな目に遭っているのだ。そのうえテレビ局が率先して“節電”を呼びかける。だったら5つもある民放が、順番に5日に1日放送をやめりゃいいじゃないか。どうせ同じようなことしかやってないのだから。特にBSなんか、テレビショッピングしか流してないんだから全部やめればいい。節電というなら、まず自分が率先しろよ。



震災後、何人かの同世代の知人と会った。彼らもまた私と同じく“複雑な衝撃”を受けていた。私たちに共通していたのは一言でいえば自己嫌悪である。なぜあの時代に原発を止められなかったのかという後悔であり、とうとう起きてしまったことへの責任感のようなものだ。

若い世代は違う。彼らは原発を当たり前のもんとして育った。むしろ、地球温暖化防止の“クリーンエネルギー” (!!)だと教えられてきたのだ。

でも私たちは違う。核エネルギーを導入する

にあたっては激しい反対論があり原発の建設にも地域ぐるみの反対運動がくりひろげられた。

もちろん私も反対。私の反対の根拠はいくつかある。子どものころに広島で育ち、放射能の怖さを身近に見聞きしていたことも一つ。さらに最新科学である核を十分コントロールできるのかという不安、そしてそれを「安全」と言い切る科学者たちの傲慢さへの不信、政府、財界、マスコミをあげての推進という「大政翼賛会」のような、キャンペーンへの本能的反発などなど。今思えばこうした素朴で直観的な反対論こそ正しかったことがよくわかる。それでも彼らは「想定外」と言えば済むと思っているらしい。一句つくった。

「想定外、想定外で、地獄行き」

想定外ではない。想像力不足だ。いや傲慢である。その傲慢さはまだ続いていく。静岡県の中部電力の浜岡原発は、今回の経験から12mの防波堤をつくるのだそうだ。やれやれ、津波で壊れた防波堤のコンクリートが原発にぶつかって大破するだけではないか。



テレビはもちろんだが、新聞や雑誌の報道にも私は違和感だらけだ。菅首相を揶揄する記事がじつに多い。たしかに頼りない。しかし財界や東電とベッタリで原発を推進し続けてきた自民党ならもっとひどかったことは疑いない。住民とともに総撤退して、後は野となれ山となれ、なんて可能性だって強かったと思う。

東電へのバッシングも多い。テレビ局と違って東電からはあまり広告料をもらってないのだろう。たしかに東電をはじめ電力会社の体質はひどい。でも、事故の隠ぺい、データの改ざんなんか日常的で、それをいまさら批判してどうするんだ。彼らはそんなことは悪いことだとは

思っていない。なぜならもっと悪いことをして原発を推進してきたのだから。

私は責めるべきは政府でも原発でもないと思う。電力会社に責任はある。原発を推進してきた自民党政府はもちろん、それを継承した民主党政府にも責任はある。

しかし、私たちみんながそれを選んだのだ。私のような原発反対の人間も含めて、より安価な電力で経済力を高めるという道を選んできたのである。そしてその経済力による豊かさを享受してきたのだ。さらに、もう少しで原子力発電を「クリーンエネルギー」だと信じこまされるところまで来ていたのである。

もちろん、選んだのではなくて、無理やり選ばされたとは言える。財界と自民党は「日本が豊かさを保つのか、それとも落ちぶれるのか」という二種択一で国民を脅かすキャンペーンを始めた。原発に反対する者は“非国民”であるかのように扱った。

武器は二つ。金と暴力だ。交付金、補助金、さらにワイロが飛び交った。地元の俗物有力者、議員、町内会長の順に買収されていった。それでも反対する者には暴力団を雇って脅かした。村八分もイジメもあった。もちろん反対もあった。原発賛成派の子どもがイジメられることも。不審死や自殺も多くあった。原発反対の科学者やジャーナリストも露骨に脅かしを受けたという。

今では当たり前だと思われている原発エネルギーはこうして日本に定着し、今では全電力の4分の1を占めるまでになった。こうした金力という暴力と直接の暴力とで原発はできあがった。だから彼らは、事故の隠ぺいやデータの改ざんなんか悪いことだとはちっとも思っていないのだ。「国際競争力のために安価な電力」を求めての原発推進は、たしかに自動車や電気製品、ICチップを大量に輸出したかもしれない。しかし、それは同時に、人の命や生活を安価に

みなすことから始まっていたし、さらにそこへ帰着していったのが今回の事故なのである。



私たちは「日本が勝ち組になるか、負け組になるか」という二者択一的脅迫に屈するかたちで原発社会を選ばされた。しかし、そうやってつくられた社会はどんな社会だっただろうか。グローバルスタンダードについていくために効率を求められ、過酷な長時間労働のあげくの非正規労働者への転落、いじめと自殺をもたらしたのではなかったか。

二者択一を迫られたときは、これはワナだと思っただろうがいい。第三の道、第四も第五もあるはずなのだ。なにより、二つに一つという想像力の欠如した問いにはのらないことだ。

原発を使わないで豊かになる方法だってあると考えないのだろうか。電力は少々高いかもしれない。しかし、日本にしかつくれない商品をつくれれば少々高くても世界中で買ってくれるだろう。もっとも画一的教育を受けた日本人にそんな独創性が残っているかどうかという問題はあられるけれど。

いまだに原発のない国の人たちは貧困にあえいでいるだろうか。イタリアやスイスやノルウェーの人たちはどう見ても日本人よりも幸せそうに見えるじゃないか。ドイツ政府はかつて原発全廃を決めた。その後の政権交代で元に戻るのだが、今回の日本での原発事故によって二十数万人の反原発デモが起こり、原発反対を訴える党が地方選挙で躍進しているという。

なぜ日本の若者たちは反原発のデモを起こさないのだろうか。ボランティアと同じくらい大切なものではないか。もっとも多くの「若者」は就活で忙しい。「正規雇用かホームレスか」という二者択一を迫られているからだ。

「おじさんたちは闘ったぜ」なんて言う気はない。あれも乱暴な二者択一だった。下宿や寮の部屋に各党派がオルグ（＝組織化。勧誘や説得くらいの意味）にやってくる。明日のデモに参加しろというのだ。「デモに出るヤツはベトナム人民の味方、出ないヤツはアメリカ帝国主義の味方、さあどうする?」。だから当時の若者はみんな悩んだ。気が狂ったやつも自殺したやつもいた。



原発にちゃんと反対しようと思う。もちろん二者択一じゃない形で。だって、原発の事故で避難を強制されて最も犠牲になるのは老人である。特に要介護老人だ。今回の地震・津波、そして原発事故でも多くの老人たちが死に至らしめられた。老人たちを放置して逃亡したる関係者もいた。逆に、老人を避難させるために自分を犠牲にした関係者もいたと報じられている。頭が下がる。

つまり、原発が一旦事故を起こせば、犠牲になるのは要介護老人と心ある介護関係者である。そんな原発が日本中に存在しているのだ。日本中の54基（原子炉）の原発から30 km圏内に無数の老人介護施設がある。その命と生活が脅かされているのだ。

もっと発展を、もっと豊かにという、いきっぱなしの思想*の象徴が原発である。それらは哲学者フーコーが言ったように「死を無視することで近代は成立した」、その究極が原発事故だったと思う。死とそれに至る老いという自然にちゃんと向き合うこと、地震や津波といった大自然に勝とうなどと思わないことが求められているのだ。すべての浜辺の原発に20 m、それでもだめなら30 mの防波堤を建てようなどという、どこまでいっても懲りない近代人の発想



2011年3月、宮城県石巻市の風景／撮影：園 吉洋（山形県・デイサービスめぐみ）

を卒業すべきなのだ。それはバベルの塔だから。

原発の製造はただちにストップする。特に、東海大地震に見舞われる浜岡原発はすぐに停止し、廃炉化する。さらに、古い原発から廃炉とする。不足する電力はできるだけホントのクリーンエネルギーで補充するが、それでも足りないものは石油、石炭、天然ガスでもやむを得ない。しかし、すでにカナダの電力使用の4分の1以上を占めている水素による発電は日本でもすぐ実用化できるはずだ。水素は爆発の危険性はあるが、放射能はばらまかない。

それよりなにより、安全な電力でつくることのできるだけの自動車、電気製品、電子部品をつくるということではないか。目の前の金もうけに走った結果、日本製品に放射能汚染のレッテルがついて、かえって売れなくなっているのだから。

しかし、もしそうした脱原発の政策を日本人が選んだとすれば、財界はおそらく自衛隊を使

ってクーデターを起こすだろう。なに、彼らにとってはそれまで使っていた暴力団が暴力装置に代わるだけの話である。

経済より老人のいのちを大事にしよう。それが老いと死にちゃんと関わる^{かえ}還り道の思想に近づくことである。

*いきっぱなしの思想、還り道の思想、については『最強の老人介護』（講談社刊）の第一部を参考に。

*追伸1. 浜岡原発の堤防は、その後津波の規模が判明したあと15mに変更された。

*追伸2. 原発反対デモは行われている。しかしテレビも新聞も報じない。何しろ電力会社、日立、東芝、三菱、みんな大事な広告主である。

*追伸3. 毎日新聞は偉い！ 4月18日付で「浜岡原発を止める！」と主張している。新聞を毎日に変えよう。私の連載も読めるし。

雑誌『AERA』が防毒マスクを表紙にしたところ、危機感を煽る、とクレームが来て、謝罪した。危機感のない人、さらに電力会社、日立、東芝、三菱や財界などに丸め込まれている人にこそクレームを！ テレビの広告で「デマにふりまわされないようにしよう」と言っている。そのとおり、他の原発は安全だなんてデマにふりまわされないようにしよう。（三好）

